



校長 坂本 晋

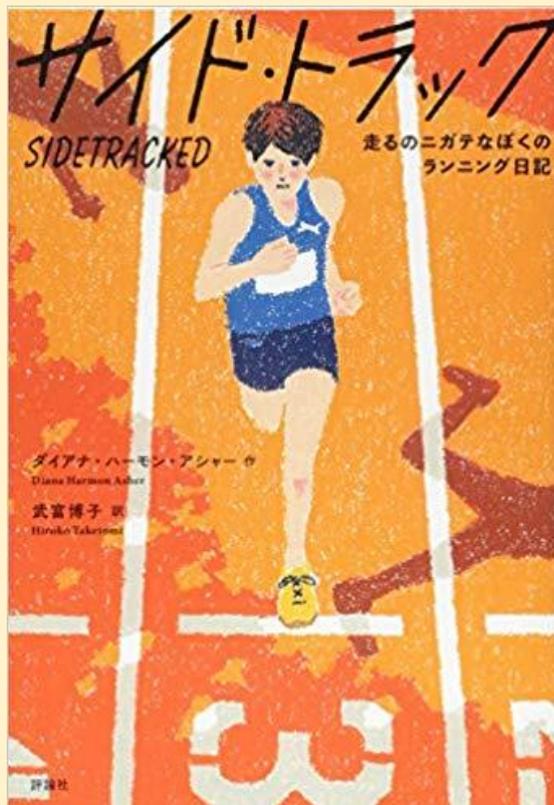
みたけが原便り

第7回 「スーパーヒーロー」

(10月全校朝会より)

新しい生徒会役員も決まって、附中も秋たけなわですが、皆さんはどんな秋を過ごしているでしょう。食欲の秋？芸術の秋？ラグビーのワールドカップで盛り上がっていますが、スポーツの秋という人も。読書の秋という人もいるのではないのでしょうか？最近嬉しかったことがあります。

盛岡市の読書感想文コンクールで2年生の熊谷さんと村松くんの二人が見事優秀賞を受賞しました。今日配付してもらった図書館報に載っていますのでぜひ読んでみて下さい。わたしも読みましたが大変感心した。触発されることがたくさんありました。それを伝えたいと思うのですが一度では伝えきれないので、2回に分けてまず今日は、「サイド・トラック：走るのニガテなぼくのランニング日記」を読んだ熊谷さんの読書感想文、「スーパーヒーロー」について、「感想文」の「感想」を話します。



この本は、ADD（注意欠陥障害）という発達障害を抱えたアメリカの中学生、12歳のジョセフが陸上競技に打ち込むことを通じて変わっていく、成長していく物語です。そしてこの感想文が素晴らしいのは、読み進めるにつれて読み手の熊谷さん自身が大きく変わっていく、成長していく所にあります。

最初熊谷さんは、運動がニガテでしかもADDという障害を持ったジョセフが陸上なんかやったってどうせ苦勞するだけ、ムリムリ止めとけばいいのにと、もどかしい気持ちになります。

でも、主人公ジョセフは思います。「他人には簡単に勝てないかもしれないけれど、自分に勝つことならできるはずだ」そう考えて一生懸命練習し、それに連れて記録も伸びていきます。

障害とかハンディキャップがあると、どうしても他人と比べて苦しむことになりがちですが、ジョセフは今日の自分を乗り越えようとする明日の自分のために頑張ろうとします。

すると、不思議ですね。熊谷さんもだんだんジョセフを応援する気持ちになっていきます。でもそれにつれて何故か最初に感じたもどかしい気持ちも大きくなっていく。「おかしいなあ、変だなあ・・・」そして、熊谷さんはハッと気がつきます。このもどかしさは、無謀な挑戦をするジョセフに対する気持ちではなく、自分自身に対するもどかしさだったんだ！

熊谷さんは思います。「わたしは、苦手なことをやる前から諦めてしまっていた。だから味気ない学校生活になっていたんだ。」そう直感します。

わたしは、ここまで読んでふと思い出したことがありました。

皆さんはイソップ物語を知っていますね。ではウサギとカメの競走の話は？

では尋ねますが、ウサギはなぜ亀に競争しようと思ったのでしょうか？思うんですが、きっと亀なら負けるはずがない、確実に勝てると踏んだからですね。ウサギはもしも相手が狐とかチータとの競走であれば、最初から勝負を挑まなかつたらと思う。やっても無駄と思われる努力は端っから諦めて初めからやらない。ウサギはそういう空しい生き方の象徴であるように思います。それに対して、亀が勝った理由はただ一つ。それは他は（ウサギは）どうあろうと、自分の見定めたゴール・目標に向かってひたすら自分の足で歩き続けた事です。

何かに挑戦して100%達成できるなら、誰でもやります。でも最初からどうせクリアできると分かっているのでは詰まらない。そうでないからこそ、もしかしたらできないかもしれないという所で、自分を信じて頑張るからこそ出来たときの達成感が嬉しいんですね。

個人の能力には違いがあります。しかし、結果を出す人に共通しているのは、情熱を持って見えない所でも地道ないい努力を続けているということです。努力したから100%報われるとは限らない。でも、初めから諦めてしまえば、そこからの進歩は100%ありえません。ここに大きな違いがあります。

さあ、諦めずに挑戦し続けたジョセフは、決勝戦で大事な耳栓を壊されてしまうというアクシデントからも逃げずに（ADDという障害は破裂音、たとえばスタートのピストルのパンという音を聞くとパニックになってしまうんですが）レースに挑み、見事自己ベストを達成、チームも2位に輝きます。

熊谷さんはこう書きます。「この本を読んでいたら、今の自分に満足できなくなった。わたしはもっともっと大きく成長できる。自分自身で『限界』さえ作らなければ、できないことなんて何一つないのだ！」

ラグビーのワールドカップが日本で開催されています。昨日のスコットランド戦も素晴らしい試合でしたね。でもその前、日本代表は世界ランキング2位のアイルランドを相手に大金星を上げました。ここで負けていれば、もう後がなかった試合です。その試合、大一番を前に、ジェイミー・ジョセフヘッドコーチは居並ぶ選手たちにこう宣言します。

「誰も勝つとは思っていない。誰も接戦になるとは思っていない。誰も僕らがどれだけ積み重ねて（犠牲にして）きたかを知らない。信じているのは僕たちだけだ！」こういうメッセージ。本当にその通りになりました。格好いい、クールですね。

スポーツの世界には「リミテッド・ビリーフ」という言葉があります。直訳すると「制限された思い込み」かな。「自分にはムリだ」そう思った瞬間、その人は自分の持っている潜在能力と可能性にフタをしてしまうことになる。自分で見えない壁、限界を作ってしまうことになります。なんともモッタイナイ。

いたずらに他人と比較して一喜一憂するのではなく、自分の弱さや欠点と向き合ってそれをどう克服するかに全力を注ぎましょう。スポーツでも勉強でも「自分の記録」が伸びた時（超えるのは難しいと思っていた壁を破ることができた時）、人は幸せを感じます。そしてその時、その人は間違いなく成長します。

附中の仲間同士、仲良く切磋琢磨しながら、それぞれの成長の秋にしていきましょう。

（さかもとすすむ／盛岡中央高校附属中校長）

